

---

---

---

# CentreCOM® AT-TSシリーズハブ リリースノート

---

AT-TSシリーズハブをご購入いただき、誠にありがとうございます。この文書は、ファームウェア(Omegaソフトウェア)のバージョンアップにともない、追加変更された内容や、ご使用前にご理解いただきたい注意点など、お客様に最新の情報をお知らせするものです。最初にこのリリースノートをよくお読みになり、本製品を正しくご使用ください。

## 記述内容

Trapメッセージ送信の制限 .....	1
Authentication Trap機能の追加 .....	1
設定の初期化機能の追加 .....	2
コンソールとTelnetのイネーブル・ディセーブル機能の追加 .....	3
「タイムアウト」のデフォルト値が 5 秒に変更 .....	4
冗長構成機能の追加 .....	5
ポート学習機能切替え機能の追加 .....	12
ポートに登録できるMACアドレス数限定機能の追加 .....	14
ソースアドレステーブルの表示方法指定機能の追加 .....	16

## Trapメッセージ送信の制限

---

頻繁に Trap が発生(例えば、セキュリティ機能による未登録 MAC アドレスを検知した場合の Trap 等)する状況では、発生した Trap の一部が送信されないことがあります。

## Authentication Trap機能の追加

---

SNMP エージェント機能において、Authentication Trap 機能が追加されました。snmpEnableAuthenTraps オブジェクトが Enable のとき、SNMP マネージャのコミュニティ名とAT-TSシリーズハブのコミュニティ名が一致しない場合にTrapメッセージが送信されます。

## 設定の初期化機能の追加

「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の「4.0 A: 管理情報(Administration)」をご参照ください。

「A: 管理情報(Administration)」メニューに下記機能が追加されています。

### R: 設定を工場出荷値に戻します

すべてのパラメータを工場出荷時のデフォルト値にもどします。



**注意** - このメニューを実行すると、IPアドレスなどもNullに初期化されますので、ご注意ください。

- メニューを実行後、画面表示が英語になります。日本語画面表示にもどす手順は次の「設定の初期化手順」をご覧ください。

### 設定の初期化手順:

「A: 管理情報(Administration)」メニューから“R”を入力し、リターンキーで確定します。次に実行を確認する画面で“Y”を入力、リターンキーで確定します。

メインメニューに戻り“Q”を入力後リターンキーで確定し、Omegaソフトウェアを終了します。さらにリターンキーを押すとメインメニューが英語で表示されます。

メニュー表示を日本語にもどします。“A”を入力しリターンキーで確定し、「Administration」メニューを表示します。“L”を入力後リターンで確定し、言語オプション選択メニューを表示します。“J”を入力し日本語を選択、リターンキーで確定します。リターンキーを2回入力してメインメニューに戻ります。

# コンソールとTelnetのイネーブル・ディセーブル機能の追加

「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の「4.2 P: パスワード/タイムアウト」をご参照ください。

「A: 管理情報(Administration)」メニューの「P: パスワード/タイムアウト」が「O: Omega オプション」に変更になりました。

「O: Omegaオプション」メニューは、 の新機能を含む4つのサブメニューから構成されています。リータンキーを押すと次の順にサブメニューが表示されます。

パスワード設定  
タイムアウト値設定  
コンソール接続の制限設定  
Telnet 接続の制限設定

、 については「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の「4.2 P: パスワード/タイムアウト」をご参照ください。

## コンソール接続の制限設定

コンソールポート(RS-232)経由の接続をEnabled(イネーブル)またはDisabled(ディセーブル)にします。キャラクタキーを入力後、リターンキーを押すと設定が切り替わります。

Enabled(イネーブル) Disabled(ディセーブル)間でトグルになっています。

## Telnet 接続の制限設定

ネットワーク(Telnet)経由の接続をEnabled(イネーブル)またはDisabled(ディセーブル)にします。キャラクタキーを入力後、リターンキーを押すと設定が切り替わります。

Enabled(イネーブル) Disabled(ディセーブル)間でトグルになっています。

---

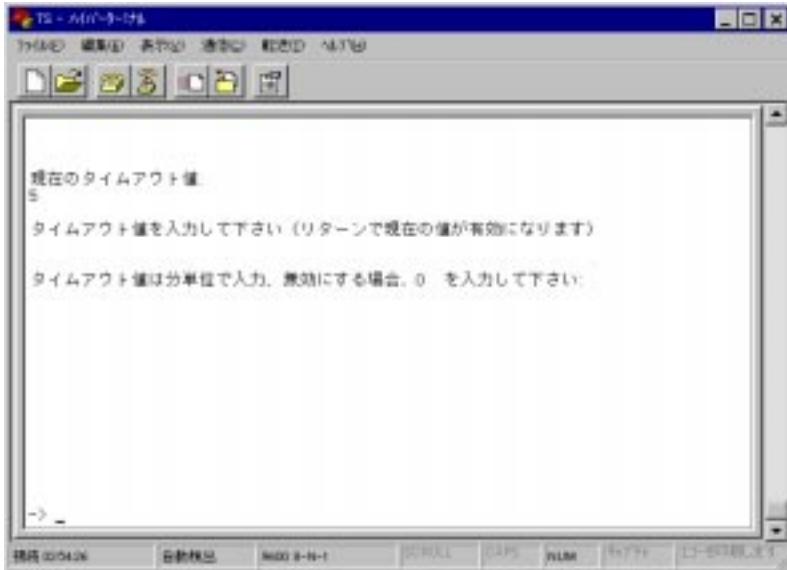
**注意** 両方を「Disabled」にすると、再ログインできなくなりますのでご注意ください。

---

## 「タイムアウト」のデフォルト値が「5」に変更

「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の「4.2 P: パスワード/タイムアウト」をご参照ください。

「A: 管理情報 (Administration)」－「O: Omega オプション」メニューの「タイムアウト」のデフォルト値が「5」に変更になりました。



## 冗長構成機能の追加

「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の「7.1 ポートの設定メニュー」の補足です。

「ポートステータス」メニューからポート番号を入力したポートの設定メニューに、「V: 冗長構成の設定」が追加されました。

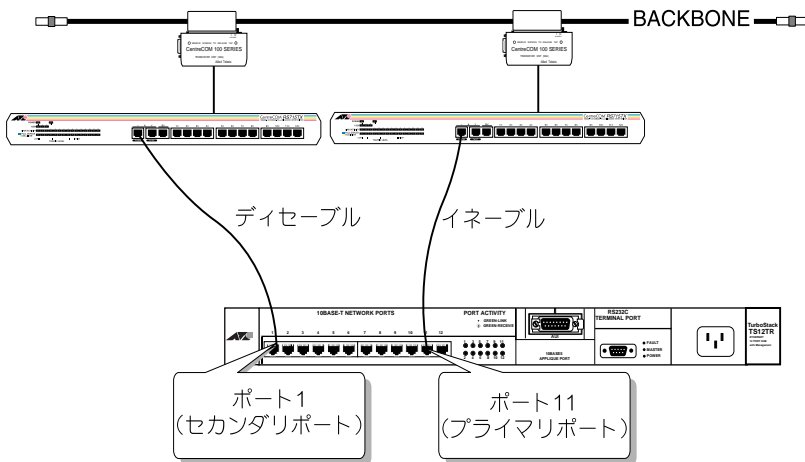


クリティカルなネットワークポート(プライマリポート)に、対となるセカンダリポートを設定します。プライマリポートに何らかの障害が発生している間、プライマリポートに代わってセカンダリポートを作動させることにより、より信頼性の高いネットワーク構築が可能になります。

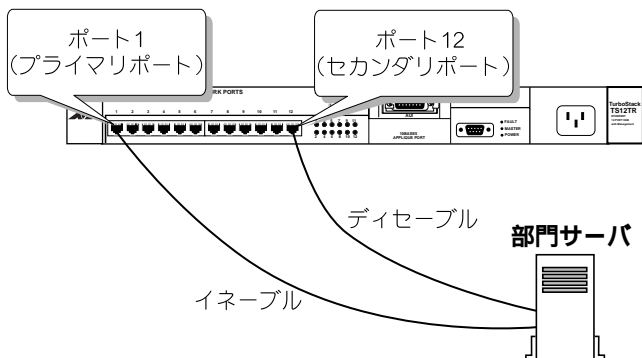
プライマリポートとセカンダリポートを1組として、12ポートハブでは6組、24ポートハブでは12組設定することが可能です。

# 冗長構成機能を使用したネットワーク構成例

## トポロジー A:



## トポロジー B:



トポロジー Bは部門サーバのLANアダプターの設定 / 仕様によっては構成できない場合があります。

プライマリポートがイネーブル、セカンダリポートがディセーブルの状態から、次の2つの状況下においてポート切り替えが作動します。

## [ 正しくリンクが形成されていない ]

---

**通常**                      **プライマリポート(Enable) セカンダリポート(Disable)**

プライマリポートに対するリンクテストで  
リンクが正しく形成されていないとき

---

**ポート切り替え** **プライマリポート(Disable) セカンダリポート(Enable)**

プライマリポートに対するリンクテストで  
リンクが正しく形成されたとき

---

**復帰**                      **プライマリポート(Enable) セカンダリポート(Disable)**

プライマリポートに対するリンクテストの頻度、プライマリポートとセカンダリポートの切り替えのタイミングはすべてOmegaソフトウェアによって制御されています。

---

**メモ**    リンクテスト機能は10BASE-Tポートに限り作動するので、AUIおよび10BASE2ポートにおいて、リンクのダウンが原因でポート切り替え機能が作動することはありません。

---

## [ 自動切り離し・データが受信されない ]

---

**通常**                      **プライマリポート(Enable) セカンダリポート(Disable)**

- マルチプルコリジョン等の発生によるプライマリポートの自動切り離し
- [ 通信異常の検出時間 ] によって特定された時間の間データが受信されないとき

---

**ポート切り替え** **プライマリポート(Disable) セカンダリポート(Enable)**

[ プライマリポート復帰確認間隔 ] によって特定された間隔で、[ 通信異常の再検出時間 ] によって特定された時間、プライマリポートのテストを行います。

例) 下記設定値の場合プライマリポートのチェックは、『60秒毎』に『200ミリ秒間』行われます。

プライマリポート復帰確認間隔(秒): 60

通信異常の再検出時間(ミリ秒): 200

自動切り離しの解除、またはデータの受信が確認されたとき

---

**復帰**                      **プライマリポート(Enable) セカンダリポート(Disable)**

---

**注意**                      対となるプライマリポートとセカンダリポートは、同じハブ上のポートでなくてはなりません。片方のポートが他のハブにカスケード接続されたような構成は冗長構成機能サポート外ですのでご注意ください。

両ポートがトポロジーA(6ページ参照)のようにバックボーン接続されている場合は、両ポートの「ポート学習機能」をディセーブルに設定してください。「ポート学習機能の切替え」については、本リリースノート12ページをご参照ください。

---



## 冗長構成ポートの設定

ハブ上のポートでプライマリポート、セカンダリポートを決めます。

ここでは、ポート1をプライマリポート、  
ポート2をセカンダリポートに設定する手順を示します。

「ポートステータス」メニューからポート1を選択します。

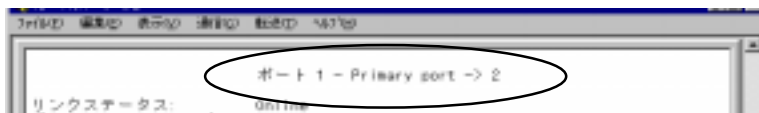
“V”を入力して「冗長構成の設定」メニューを選択すると以下の画面が表示されます。



“A”を入力して、「セカンダリポートの設定」を選択します。



画面にしたがって“2”を入力後、リターンで確定し、ポート2をセカンダリポートとして設定します。さらにリターンを押すとポート1のポートステータスが表示され、冗長構成機能の設定を確認することができます。



### [ 通信異常の検出時間 ] の設定

プライマリポートにデータが受信されない状態が何秒間続いたら、セカンダリポートに切り替えるかを設定します。

デフォルトは 60 秒です。

データの受信をチェックしない場合は “ 0 ” ( ゼロ ) を入力してください。

プライマリポートの「冗長構成の設定」画面から

“ B ” を入力後、リターンで確定します。

画面にしたがって 0 ~ 65,535( 秒 ) の範囲で値を入力します。

### [ プライマリポート復帰確認間隔 ] の設定

プライマリポートからセカンダリポートに切り替わった後、何秒後にプライマリポートをイネーブルにし、通信状況をチェックするかを設定します。

デフォルトは 60 秒です。

プライマリポートの「冗長構成の設定」画面から

“ C ” を入力後、リターンで確定します。

0 ~ 65,535( 秒 ) の値を入力します。

---

**注意** [ プライマリポート復帰確認間隔 ] の値が “ 0 ” ( ゼロ ) の場合、一度セカンダリポートに切り替わるとプライマリポートのチェックは行われず、セカンダリポートがイネーブルにされたままになります。この場合、プライマリポートへの切り替えは「 P: ポートステータス」メニューから手動で行ってください。

---

## [ 通信異常の再検出時間 ] の設定

セカンダリポートがイネーブルに切り替わったのち、プライマリポートの通信状態をテストする時間を 1000 分の 1 秒単位で設定します。

ここで特定された時間、プライマリポートはイネーブルになり、セカンダリポートで受信されたパケットは送信されません。

デフォルトは 200 ミリ秒です。

“ D ” を入力後、リターンで確定します。

画面にしたがって 100 ~ 65,535( ミリ秒 ) の範囲で値を入力します。

[ 通信異常の再検出時間 ] 内にプライマリポートでのデータの受信、または自動切り離しの解除が検出されなかった場合、プライマリポートは復帰せず、再びセカンダリポートがイネーブルになります。

## ポート学習機能切替え機能の追加

---

「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の「7.1 ポートの設定メニュー」の補足です。

「P: ポートステータス」メニューからポート番号を入力したポートの設定メニューに、「T: **ポート学習機能の切替え**」が追加されました。

ポートごとの MAC アドレス学習機能を Enabled(イネーブル)または Disabled(ディセーブル)に設定します。

Enabled(イネーブル) Disabled(ディセーブル)間でトグルになっています。

MAC 学習: Enabled

ポートが新しいソースアドレスからパケットを受信するたびに、ソースアドレステーブルがアップデートされます。

---

**注意** 「セキュリティ」メニューの「E: セキュリティ機能-ソースアドレス table 固定; 未登録 MAC アドレスプロテクト」が有効な場合は、「T: ポート学習機能の切替え」の Enabled(イネーブル)・Disabled(ディセーブル)に関わらず、ソースアドレステーブルはロックされアップデートされません。

---

MAC 学習: Disabled

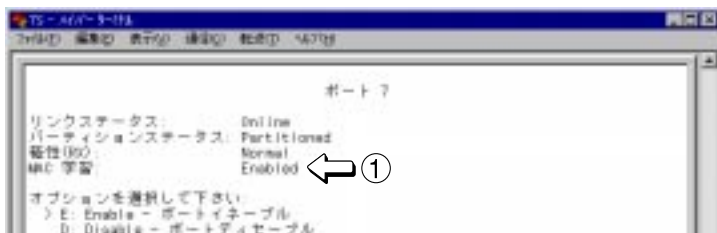
ソースアドレステーブルはロックされた状態になり、ソースアドレステーブルはアップデートされません。



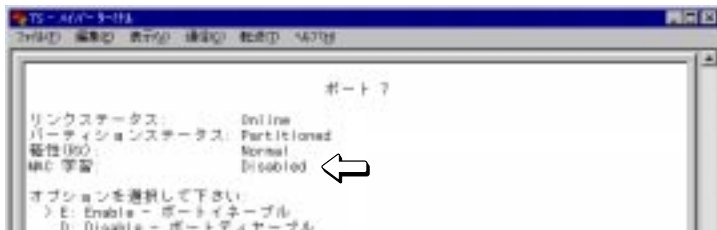
「セキュリティ」メニューの「F: 学習機能-ソースアドレス学習; 未登録 MAC アドレス登録」が有効な場合も、ポートごとにポート学習機能を Disabled(ディセーブル)にすることができます。

## ポート学習機能の切替え

ポートの設定メニュー画面の「MAC 学習」の項目で現在のポートステータスを確認します。



“T”を入力して、リターンで確定します。  
ステータスが切り替わったことを確認します。  
で Disabled の場合、 は Enabled に、  
で Enabled の場合、 は Disabled になります。



## ポートに登録できる MAC アドレス数限定機能の追加

「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の「8.2 セキュリティ機能の設定方法」をご参照ください。

「S: セキュリティ」メニューの「ソースアドレス学習モード」に下記機能が追加されました。

G: ポートごとに登録できる MAC アドレスを1つに設定

H: 受信した MAC アドレスをすべて登録



次の 、 で選択したオプションの組み合わせにより 4 種類の設定が可能です。

#### **セキュリティの有効/無効を設定するオプション**

E: **セキュリティ機能-ソースアドレスtable固定;未登録MACアドレスプロテクト**  
ソースアドレステーブルはロックされた状態になり、未登録MACアドレスからのフレーム検出時には、「MACアドレスセキュリティ」で選択されたオプションを実行します。

#### **F: 学習機能-ソースアドレス学習;未登録MACアドレス登録**

ポートが新しいソースアドレスからパケットを受信するたびに、ソースアドレステーブルがアップデートされます。

#### **ソースアドレステーブル上に登録可能なエントリの数を制限するオプション**

##### **G: ポートごとに登録できるMACアドレスを1つに設定**

受信ソースアドレスのテーブル上にエントリされるMACアドレスの数を1ポートにつき1つに制限します。

##### **H: 受信したMACアドレスをすべて登録**

受信ソースアドレスのテーブル上にエントリされるMACアドレスの数を1ポートにつき1つに制限しません。

---

**注意** 上記“オプションEとG”が有効で、かつ冗長構成機能をご使用の場合は、冗長機能対応ポートのMACアドレスの登録はご利用になっている環境にあわせて行ってください。

---

# ソースアドレステーブルの表示方法指定機能の追加

「AT-TS Series オペレーションマニュアル」の 8.2.2 ソースアドレステーブル(SAT)をご参照ください。

「S: セキュリティ」- 「A: ソースアドレステーブル表示」メニューに下記機能が追加されています。

**A: 登録されているすべての MAC アドレスを表示する**

登録されているすべての MAC アドレスとそのポート番号を表示します。

**B: 指定ポートに登録されている MAC アドレスを表示する**

登録されている MAC アドレスのうち、指定したポート番号でパケットを受信した MAC アドレスを表示します。

**C: 指定 MAC アドレスから、登録されているポートを表示する**

登録されている MAC アドレスのうち、指定した MAC アドレスでパケットを受信したポート番号を表示します。

